

MACC^{マツク}通信

Monozukuri Arakawa City Cluster

第12号

2009年12月24日発行

荒川区が進める「MACCプロジェクト」は、荒川区独特の多彩な産業集積を活かし、区内企業の顔の見えるネットワークの形成を支援することで、荒川区の産業振興（商品開発や販路拡大など）を図ろうとするものです。「MACC通信」は、「MACCプロジェクト」に関わるホットな情報をお届けしていきます。

今回は、「第4回MACCプロジェクト・フォーラム」（11月18日開催）、『健康福祉ビジネス研究会』発足、「東葛川口くば（TX沿線）地域新産業創出ネットワーク」主催『先端研究成果産学官交流会』についてのトピックスです。

第4回MACCプロジェクト・フォーラム「地域間連携への展望」開催

～「MACCプロジェクト」&「KICCプロジェクト」～

MACC（荒川区モノづくりクラスター）プロジェクトを運営する荒川区は、11月18日サンパール荒川で「第4回MACCプロジェクト・フォーラム」を開催し、北区・板橋区が推進する地域資源活用型産業活性化プロジェクト「KICC（キック）プロジェクト」との地域間連携を探る初会合を持ちました。フォーラムには両プロジェクトで活動する企業や支援機関などから約60名が参加し、それぞれの取り組み概要を紹介し合い、初の交流会も開かれました。この日の交流を契機に、モノづくり中小企業が集積する3区の産業振興に向けて、両プロジェクトの事業連携を強めていくことになりました。



西川区長

荒川区と北区・板橋区の産業振興で連携へ

フォーラムの冒頭、MACCプロジェクト推進協議会の会長でもある荒川区の西川太一郎区長が「MACCプロジェクトは足掛け4年が経過した。着実に実績をあげているが、まだ緒についた段階。現況の厳しい情勢を乗り越えるためにも、さらに知恵をしぼり、取り組みを強化する必要がある。KICCは地域活性化の取り組みではMACCの先輩格なので、見習う点が多い。私は板橋区の坂本区長や区議の方々と「アイの会（荒川のAと板橋のI）」という勉強会を結成して自治体同士の連携も進めているが、今後は北区も一緒になって、モノづくりの盛んな地域同士が区のボーダーを乗り越えて連携し、産業振興を加速したい。」と挨拶しました。

(有)板垣製作所、首都大学東京産学公連携センターに感謝状を贈る

続いて、MACCプロジェクト活動に多大な貢献をされた事業者及び支援機関として「(有)板垣製作所 板垣隆代表取締役」と「首都大学東京 産学公連携センター」に感謝状が西川太一郎区長から贈られました。

板垣製作所は産学連携による新商品開発活動に積極的に取り組んだ結果、首都大学東京健康福祉学部との連携で自立杖「フェレット」を開発し、NHKの番組「いっと6けん」を始めとして多くのマスコミに取り上げられるなど、MACCプロジェクトの知名度向上に大きく貢献をされました。現在でも産学連携による健康促進用「頸椎トレーニング器具」の開発にも取り組んでいます。

首都大学東京の産学公連携センターは、MACCプロジェクトが目指す産学連携による新商品開発に中核的な役割を果たしました。高齢者ニーズの調査やメタボリッ

クシンドローム（内臓脂肪症候群）の勉強会を開催し、新商品のタスクフォースへの研究シーズを提供したことにより、MACCプロジェクトから理学治療用補助具「2



表彰式の様子

WAYセラベル」「2WAYセラウエッジ」、自立杖「フェレット」、介護補助用具「介護スリング」など、数多くの新商品が誕生しています。

このあと、MACCプロジェクトとKICCプロジェクトの活動概要が報告され、地域間連携に向けた交流会も開かれました。概要は次のとおりです。

◆MACCプロジェクトの紹介

報告者:高村朋希氏(MACCコーディネータ)

MACCプロジェクトは、荒川を元気な街にするために区内のモノづくりに関わる新事業展開を支援し、荒川版産業クラスターを形成することを目指しています。平成16年にスタートしてから丸4年が経過し、現在の会員企業数は約80社。今年度からは荒川版クラスターの「成長期」と位置づけ、プロジェクトを推進するために、区内外の支援機関や大学などと連携体制を拡充して、産・学・官の資源を活用するネットワークを強化し、本格的な展開期に入っています。

事業活動を進める上で重視していることは、強い信頼関係に支えられた“顔の見えるネットワーク”の構築です。区内の中小企業者が地域内外の経営資源を有効に活用できるよう、産学連携や産産連携などのネットワークを形成して、新商品の開発や新事業の創出を効果的に進めることを基本にしています。



高村コーディネータ

さらに、新たなステージに入った今年度からは、新商品開発や新事業創出に意欲的のある事業者(プレイヤー)を徹底的に支援し、できるだけ多くの成功事例を積み上げていく方針で臨んでいます。そのプレイヤーは中小企業者だけでなく、支援機関や大学なども対象として徹底的なサポートをすることで、新たなビジネス展開を目指すものです。

いわば「フロントランナー」を育てて新事業展開のノウハウを蓄積し、具体的な成果を挙げることにより、儲かる企業を増やして地域の富を創出していくことを狙っています。こういったサクセス・ストーリーを蓄積して、区内事業者の起業家意識を高揚し、荒川の産業を活性化するという流れが、顔の見えるネットワークの真骨頂だと考えています。

次に、MACCプロジェクトの主な取り組みを紹介します。一つは、「高齢者向け健康・福祉関連製品開発プロジェクト」で具体的な成果を上げています。産学連携を背景に、MACC会員の4社が新商品を開発し、それぞれ販売実績をあげています。それが「2WAYセラベルト」「2WAYセラウェッジ」「フェレット」「介護用スリング」です。これら事業者がフロントランナーともなっています。

また昨年度より、次世代の荒川区を担う若手経営者の会「あすめし会」を結成し、“明日の飯の種”となる新たな事業開発に取り組んでいるところです。

さらに、健康福祉分野のビジネス開発に目標を絞り集中的に資源の投資を図る「健康福祉ビジネス研究会」を新たに立ち上げます。この分野は地域ニーズも強いので、関連する企業や研究機関、大学などとの連携を充実させながら、新たなテーマを設けて研究開発を進める予定です。

◆KICCプロジェクト及びその開発事例の紹介

報告者:伊藤清武氏

(KICCプロジェクト推進委員会副会長)

KICCプロジェクトは、K(北区)I(板橋区)C(クラスター)C(コミュニティ)の通称です。両区に本拠を置く企業、研究機関、人材などの地域資源を有機的に結合させ、地域課題の解決に向けたプロジェクトに取り組むという意味です。「キック」にはキックオフ、きっかけづくり、走り出すという思いも込めています。

北区と板橋区には、健康・医療・福祉関連施設や光学機器、理化学機器、製薬などの高度な技術を持った研究開発型企業・研究機関や人材など多様な地域資源があります。KICCプロジェクトはこれらの地域資源を総合的かつ最大限に活用して、健康・医療・福祉関連産業などの地域産業の活性化を推進しています。

プロジェクトは推進委員会、運営委員会のもとに個別プロジェクトチームを組織し、その内容や参加企業の実情に応じてプロジェクトの体制をつくり、地域と協力して進めています。中核となる推進委員会は、地域企業や地域住民から研究開発課題やアイデアを募集し、共同開発テーマとしての展開の可能性を探りながら運営をしています。

平成15年度にスタートしたKICCプロジェクトは今年が7年目。16~18年度はステージ1として、「地域内の連携再構築」を重点目標に事業を進め、企業連携の促進及び大学等との知の連携を促進しました。19~21年度はステージ2の段階にありますが、現在は「地域間連携の促進とコア・ネットワークの促進」を重点目標に事業展開が加速しています。岩手大学と盛岡地域、高知工科大学と高知地区、等との連携事業を始め、福祉・光学

関連等の個別プロジェクトを提案し、福祉機関との連携を前進させました。KICCの事業展開が他の異業種交流と違う点は、企業同士の交流だけでなく、行政、大学、研究機関などとの連携を重視し、住民ニーズの強いプロジェクトを推進していることです。

来年度からステージ3に入ります。重点目標はプロジェクトの地域展開を



伊藤氏

本格化し、「KICCプロジェクト推進機構」を組織化する考えです。医療機関や福祉機関など地域内関連機関との事業協力を進め、研究開発成果の地域展開を広めることにしています。その代表的事業として、官民連携で進めるウェルネスプロジェクトが事業展開の課題だと考えています。

◆「MACC流人材育成への挑戦」

（「あすめし会」の紹介）

MACCプロジェクトでは自主的かつ積極的に新事業展開に取り組む意志のある区内の若手経営者・後継者を対象として「明日の飯の種をつくる会（通称：あすめし会）」を結成し、若手経営者の育成を行っています。

ここでは「あすめし会」を牽引する豊泉MACCシニアコーディネータとメンバー3名によりパネルディスカッション形式にて会の紹介をしました。

パネリスト：橋本明秀氏（旭工業㈱代表取締役）

高橋弘明氏（㈱タカハシ代表取締役）

吉村祐介氏（花嫁わた㈱代表取締役）

コーディネータ：豊泉光男氏（MACCシニアコーディネータ）

【豊泉】 「事業は人なり」と申しますが、新商品づくりも人なりです。本気になって開発に取り組む熱心な人がいて、新商品が生まれます。その考えで、MACCプロジェクトは、まず商品開発を進める「プレーヤーの創出」からスタートしています。次いで、「アイデアの創出」、「試作モデルの製作」、「マーケティングと事業性の分析」、「製品化」、「商品化」、「事業化」というステップで新商品開発を進めています。

それから、大切なことは新たな需要や市場の創造です。現況の厳しい状況にあって、荒川区の企業は総じて受注減に苦しんでいます。その解決策は新しい需要を創り出していくことにあります。

その意味で、経営トップの社長の仕事は2つ。1つは「明日の飯の種」を創り出すこと。もう1つは、事業を引き継いでいく「明日の社長」を創り出すことです。それがMACC流の人材育成の基本認識であり「あすめし会」活動の目的です。

昨年7月に発足した「あすめし会」は、平均年齢37歳という若い世代のタスクフォースです。MACC会員10社の若手経営者あるいは後継者が、月1回の例会を通じて、それぞれ異なる業種の枠を超えて議論し、新商品・新事業開発に取り組んでいます。本日は、あすめし会の活動が自社の経営にどう役立っているかなどについて、お話を伺います。

【橋本】 当社は精密板金・金型メーカーです。私は3代目。今年9月頃から業況は上向き気味ながら業界全体は苦難期に直面し、経営の体質改善が急務な状況にあり、当社も従来の受注型企業からの脱皮を図っているところです。リスクを分散するため、長年の社歴で積み上げてきた技術を生かして競争力のある新商品、新事業を創り出していく方針で臨んでいます。売上の10%くらいは新規のもので構成する目標を設定し、具体的に案件を実行

中です。あすめし会は異業種の仲間と語論を交わし、刺激のある情報が得られる点が参考になっています。

【吉村】 布団（ふとん）の製造販売業ですが、実際にはふとんのリフォーム事業が主体です。新品のふとんを買うより、打ち直して使用するという習慣が徐々に広がり、僅かながら売上は増加傾向を続けています。私は5代目社長として半年ほど前に経営を引き継ぎましたが、将来的に厳しい状況になりかねないという不安も強いですが、環境問題は追い風ですが、本質的にサービス業なので新商品開発というよりは、新たな発想のサービス事業なり、新たな業態の開発が必要だと考えています。目下は「B to C」の分野で「感動を提供するビジネス」の展開を研究しています。価格で競争するのではなく、感動で勝負し、利益を継続できる仕組みをつくりたいと思っています。そのためのヒントをあすめし会の活動を通じて勉強しているところです。

【高橋】 当社は随分以前から事業転換を図ってきました。現在、創業時の事業の売上は1%に過ぎず、絶えず新たな事業分野を切り開いてきた経緯があります。つい最近まで自動車産業に傾注して好業績を示していましたが、世界同時不況以降はその反動で受注が激減し大きな打撃を受けているため、今はまた新たな事業体制づくりに努めている最中です。現在は、緩衝材として使用するゴム発泡体を素材にした製品が主力で、一般的に露出しにくい製品なので今後は露出度を高め、もっと目に見える製品を世に出していきたいと考えています。小さいながらも、独自性のある自社ブランド製品を開発して、新たなユーザーを獲得していこうとの気概です。あすめし会に参加して、新製品づくりの手法や経営の方向性がチェックできる点が有意義です。



パネリストの3名

左から高橋氏、吉村氏、橋本氏

◆交流会

フォーラムの終了後、MACCプロジェクトとKICCプロジェクトの初の交流会が開かれました。双方の関係者が紹介され、今後の情報交流、協力関係を強めることを確認するとともに、当日のフォーラムに参加した企業経営者や支援機関、大学を含む産学官の面々でそれぞれ歓談をしました。

『健康福祉ビジネス研究会』が発足！

MACCプロジェクトの新たな事業である特定テーマ研究会事業において「健康福祉ビジネス研究会（通称：健ビ研）」が発足し、去る平成21年11月26日（木）にキックオフミーティングを開催しました。第一部は荒川区役所、第二部は場所を文京区シビックセンターに場所を移しての開催です。

『健康福祉ビジネス研究会』とは・・・

MACCプロジェクトの中でもあるテーマに特化して短期的かつ集中的に新商品・新技術の開発を目指す「特定テーマ研究会事業」を来年度より本格的に実施する予定ですが、その第一弾として実施するのが健康福祉分野に特化した「健康福祉ビジネス研究会」です。

本研究会は製造業者・販売業者・学術機関等、製品開発の川上から川下まで様々なジャンルの方々が集い、新商品開発を目指すものです。発足時のメンバーは荒川区モノづくり企業13社、そしてその開発支援のための大学・研究機関や販売企業です。

■第一部

荒川区産業経済部研修室にて初顔合わせを行いました。石原産業活性化担当部長による挨拶の後に、豊泉シニアコーディネータにより、健康福祉ビジネス研究会が目指す「スピーディな新製品開発体制の構築」や、「コーディネータの積極的活用」について趣旨説明が行われました。



豊泉シニアコーディネータ

参加者からは「製造業者だけでなく、大学や販売業者までを含めた取り組みは珍しく今までに無いもの。今後、各々のネットワークで仕入れた情報を本研究会に持ち寄り、何としても成功事例を創出したい。」との声も挙がりました。

■第二部

第二部として文京区が開催する産学官連携事業「ここにもありますビジネスチャンス」に参加をしました。文京区に位置する5大学がそれぞれのシーズ・ニーズを持ち寄るもので、新商品開発のヒントを得るために健康・医療分野の企業が集まりました。

○お茶の水女子大学（シーズ）

- ①アミノ基分子と非硫酸化糖類複合体形成で出現した新規抗HIV活性化化合物
- ②食品成分の機能性の探索と評価

○順天堂大学（シーズ）

- ①ベビー用乳幼児固定装置
- ②エレベーター（非接触センサースイッチによる停止階入力部分）
- ③衣服着用時計（リール紐で衣服に装着する方式）
- ④歩行介助具（光を歩行前方向に投射表示し歩行を介助する）
- ⑤持続皮下インシュリン注入療法
- ⑥染色組織標本の陽性細胞の可視化解析法
- ⑦気管支喘息体感マスク

○中央大学（シーズ）

- ①アークプラズマの応用
- ②レーザー光による液中マイクロバブル生成を利用したナノ物質流体操作技術



シーズ・ニーズ発表風景

○東京医科歯科大学（シーズ）

- ①有機—無機ナノハイブリッド：ナノゲル・アパタイト複合体
- ②ナノ振動・加熱・圧着による新しい生体組織接着技術、その他

○日本医科大学（ニーズ）

- ①着脱しやすい術衣
- ②横向き体位固定マット
- ③手術中の横向き体位の腕支持器
- ④新生児の安全管理機能付きベビーコット

今後も健康福祉ビジネス研究会では積極的なテーマ研究・情報交換を経て新商品・新技術の開発を目指していきます。

我こそはと思う方、新商品開発に熱意のある方は是非MACCプロジェクト事務局、担当コーディネータの中村までお問い合わせ下さい。



研究会風景

東葛川口つくば(TX沿線)地域新産業創出ネットワーク主催 『先端研究成果産学官交流会』を開催!!

※東葛川口つくば(TX沿線)地域新産業創出ネットワーク

「(財)千葉産業振興センター、川口商工会議所、(株)つくば研究支援センター、船橋商工会議所、荒川区」

11月24日(火)、『先端研究成果産学官交流会』が東葛テクノプラザにて開催されました。

本交流会は、ネットワーク支援地域の中小企業に対して、大手企業の研究者や大学研究者との「出会いの場」や「情報」を提供し、研究・技術シーズと企業ニーズとのマッチングを図ることを目的に開催されるものです。

次世代を担う新エネルギーに関する技術開発が注目されている中、今回は「新エネルギー ～電池～」をテーマに、2つの「基調講演」と3つの「研究成果発表」が行われ、新事業の創出を目指す中小企業の方々にとって非常に興味深い内容となりました。

基調講演

シャープ(株)ソーラーシステム開発本部、次世代要素技術開発センター所長の町田智弘氏が、『シャープの太陽電池の技術開発動向』と題し、基調講演を行いました。

町田氏は、太陽光発電を取り巻く環境や現状について紹介した後、太陽電池の特長と課題について、「① 太陽光発電はクリーンで半永久的な太陽光がエネルギーである、② 低炭素発電の実現が可能である、③ システムの大きさに関わらず一定の発電効率をもつ、④ 天候に左右されやすく発電コストが高い、⑤ 将来の大量生産を迎えるにあたり、一部の部材において資源的な制約課題がある」と主張しました。このような特長と課題がある中で、太陽光発電の長期的な成長と太陽電池の用途拡大や新規市場の拡大に期待を寄せました。

続いて(独)産業技術総合研究所 研究コーディネータ大和田野芳郎氏が、『エネルギー技術開発の焦点「電池」』と題し、基調講演を行いました。

燃料電池、太陽電池についての基本的な解説を行った上で大和田野氏は、蓄電池のマーケット拡大による将来への影響について言及しました。また、エネルギー密度が高いリチウムイオン電池とハイブリッド車市場でのニッケル水素電池の活躍に注目し、蓄電池の性能と開発の動向についての説明を行いました。

研究成果発表

東京理科大学の荒川裕則氏が『軽くて、プリンタブル、フレキシブル、カラフルな色素増感太陽電池』と題し、研究成果の発表を行いました。荒川氏は、色素増感太陽電池の特長について、「① 構造と発電原理が従来の太陽電池とはまったく異なる、② 製造コストが従来型の太陽電池に比べ3分の1から5分の1と非常に安価になることが予想される、③ 原材料の資源的制約が少ない、④ 多種多様な製造が可能である」と論じました。一方、色素増感太陽電池の実用化の課題として、「10年程度の長期安定性の検証と確保が必要である」と主張しました。

続いて、東京理科大学の小越澄雄氏による『冷凍車用燃料電池補助電源を中心とした燃料電池の研究・開発の動向』についての研究成果発表が行われました。小越氏

は、「燃料電池補助電源は、ペイバック期間などから考えて、家庭用燃料電池と同じように、本格的な実用化の先陣を切る可能性がある。これを受けて大量生産が開始されると、燃料電池コストが大幅に低下し、広範囲での燃料電池の利用が始まることが予測される」と主張し、交流会に参加した中小企業者に対して、燃料電池分野での活躍を期待しました。

最後に、(独)産業技術総合研究所の周豪慎氏による『ポストリチウムイオン電池の開発～リチウム・空気電池及びリチウム・銅二次電池の開発』と題した研究成果発表が行われました。周氏はリチウムイオン電池の可能性と課題についての説明した後、リチウムイオン電池や燃料電池への取り組みにおいては、相互の協力体制が必要不可欠であると強調しました。



東京理科大学 荒川裕則氏による講演様

「基調講演」、「研究成果発表」の後、研究者を交えた懇親会が行われました。東葛つくば川口(TX沿線)の各地域から参加した企業間での会話も弾み、盛り上がりを見せました。

また、会場では、交流会に参加した企業のうち、展示を希望した企業(15社程度)によるパネル展示も行われ、



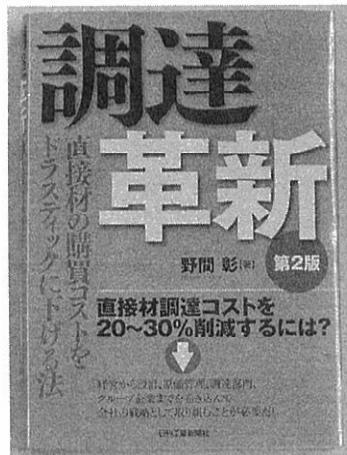
懇親会の様子

MACC会員企業もこのパネル展示を有効に活用し、研究者に積極的に質問するなど自社のPRを積極的に行っていました。

野間 彰著『調達革新—直接材の購買コストをドラスティックに下げる法—』（日刊工業新聞社、2007、2,000円＋税）

「MACC通信」第6、10号の「BOOKナビ」では、村田敏治著『受注拡大のための10の条件』（新風社、2007年、1,200円＋税）、坂口孝則著『製造業の現場のバイヤーが教える 調達力・購買力の基礎を身につける本』（日刊工業新聞社、2007年、2,200円＋税）をご紹介致しました。いずれも、メーカーの企画設計や調達部門などが、「良い調達」とは何かということ日々探求する姿が描かれていました。

今回ご紹介する、野間彰著『調達革新—直接材の購買コストをドラスティックに下げる法—』（日刊工業新聞社、2007、2,000円＋税）は、まさに「調達革新」、すなわちメーカー等の社内における開発購買の標準化や制度革新の必要性を主張する内容となっています。これまでのように、「自社に売り込みをかけてきたサプライヤー以外に、自ら情報を探す努力をしない（p58）」ようなメーカーの担当者の姿勢は、そのメーカーにとりコスト競争のみならず、価格以外の製品・商品開発競争においても敗北を招きかねないということが、メーカー側において強く意識されつつあるということが説得的に示されています。さらに本書では、全社的な集中購買などによる制度革新などを一方的に主張するのではなく、それによって生じるであろう、メーカー、サプライヤーの双方に



ならず、価格以外の製品・商品開発競争においても敗北を招きかねないということが、メーカー側において強く意識されつつあるということが説得的に示されています。さらに本書では、全社的な集中購買などによる制度革新などを一方的に主張するのではなく、それによって生じるであろう、メーカー、サプライヤーの双方に

大きく影響する問題点などについてもバランスよく言及されており、本書の主張をより説得的なものとしています。

すなわち、調達革新はコスト削減に大きく寄与する一方で、調達業務の行き過ぎた合理化は、メーカーとサプライヤーとの関係性を希薄化させ新商品開発などに必要な新たな発想や着眼、閃きといったことを刺激する「開発情報」の交流を阻害する二面性をもっているため、メーカー等の担当者も日々苦勞している訳です。

ご周知の通り、経済環境の変貌が目まぐるしく、生産・消費の動向に際しては実に多様な要因が複合的に影響する時代となりました。それにつれ従来のマーケティングの手法や定説が現実のマーケット戦略に通用しない場面に多々直面する、という声も多くの経営者から聞かれるようになりました。

こうしたなかで、これまでにご紹介した3冊は、主として調達側の反省点に依拠してかかれた言説です。これらを我々サプライヤー側から解釈すれば「相手が何を求めているか」ということ、その求めている内容それ自身が、ドラスティックに変容しつつあり、それにどう向き合っていくかという、極めて重大かつ困難な課題が我々に突きつけられていることにほかなりません。市場の声とサプライヤーとの間で試行錯誤する人たちの「痛いところに手が届く」提案や対応の仕方を考えるうえでは必須の認識です。相手の立場に立ってものを考えるということがいかに難しくなってきたことか！モノづくり現場だけでなく私たちの日常の関係性においても同様のことがいえるかもしれません。(N. S)

ちょっと一息...BOOKナビ



試験研究機関活用支援事業補助金（平成21年度版）のご案内

荒川区産業経済部では、昨今の厳しい環境下であっても新製品・新技術の開発に前向きに取り組む中小企業を支援するため、区内中小企業が東京都立産業技術研究センターを利用した際の費用を一部補助する制度を設けました。

概要は以下の通りです。MACCプロジェクト会員の皆様のご活用をお待ち致しております。

■補助の対象者

次の両方を満たす事業者が対象となります。

- ①区内に本社のある中小企業基本法（昭和38年法律第154号）第2条に規定する中小企業者であること
- ②申告の完了した直近の事業年度分法人税または前年度分個人住民税を滞納していない事業者であること

■補助対象経費

東京都立産業技術研究センターにおいて次に掲げる項目を利用した場合、その経費が補助対象となります。

- ①依頼試験・検査、②機器利用、③前記に付随する技術指導等

※講座・セミナーの受講料、ラボの使用料は補助対象外です。

※他の試験研究機関を利用した場合も補助対象外となります。

■補助額

対象経費に要した金額の2分の1の額（千円未満は、切り捨て）とし、1事業者につき1年度内に2万円を限度額とします。※申請回数は問いません。

■申請方法

東京都立産業技術研究センターにて補助対象となる利用及び支払いをした後、申請して下さい。申請から概ね1ヶ月程度で、指定口座へのお振り込みとなります。

○問い合わせ先：荒川区産業経済部経営支援課

(TEL03-3802-2311 FAX 03-3803-2333)

担当：小貫・渡邊

MACCコーディネーター TOMMYの部屋 VOL.11

荒川イタリアン物語

(すべての道はローマに通じる。そして荒川へ)

MACCシニアコーディネーター 豊泉 光男

今年も年の瀬を迎え、一段と冷え込んできました。温暖化と言えども、まだまだ冬の寒さは健在です。山々は雪化粧を施され、雄大な姿を我々に見せ付けておりますが、皆さんはお元気にしていらっしゃいますか。

雄大なる自然は、一方では、私たちに新型インフルエンザという試練も与えています。自分にとって都合が良いか？悪いかが、大自然の箱庭に住まわしている私たちだけでは、どうも考えちゃいけないようですね。生きとし生けるもの、水の惑星、地球環境のことも考えなくちゃね。いやー何か、難しくなってきました。

今回はトミーが偶然、出会ったお二人（ローマの朋子さん、荒川の若山さん）とのローマと荒川を舞台にした不思議な絆のお話です。トミーはひょんなことから、お久しぶりにイタリアに行くことになりました。と言いましても、2泊3日のローマ滞在でした。15年ぶり、9月のローマは稀にみる残暑の中でした。市内は二千年を超える遺産に囲まれ市全体が博物館といえます。特に今回はヴァチカンのシステリーナ礼拝堂のダビンチ作の「天地創造」が修復され、それに会えたことは感動の一語でした。また、今回の修復に日本人が多くの支援を行ったことも心を打つものがありました。宿泊したホテルはとても庶民的でしたが、テル

ミニ駅の近くで交通至極便利でしたので、あたりをテクテクよく散歩をしました。立ち食いピザの食べ歩きは、10件以上いきました。でも、やはりお目当てはパスタで色々探しましたよ。

そして散歩の途中、美味しそうなお店がありました。名前は「Toudine Gabriele & Tomoko」です。



Toudine Gabriele & Tomoko の店先

おや？これは日本人の店かも？白を基調とした明るい店内につかつかと入っていくと、「いらっしゃいませ」と日本人女性らしき店員さん。愛想いいですね。やはり、ここまで来ると日本語は懐かしいですよ。店内は清潔で小ざっぱりしていて気持ちがいいです。奥に年配の女将らしい女性が一人、好奇心旺盛なトミー早速声をかけます。そこからが一人目の登場人物、朋子さん物語の始まり始まりです。

この女性の名前は近藤朋子（現在65歳）さん。出身はなんと荒川区です！時は今を遡ること30年前、荒川区に住んでいた朋子さんは、うれしはずかし35歳の時を迎え、ひとつの決断をしていた。「とにかくイタリアに行こう。そして、イタリアで新しい自分を生きよう。」ローマの初めの第一歩は、ローマ三越から始まりました。慣れないお客様サービスも日に日に上達し、ローマの水にもすっかり慣れてきた。（ところで、イタリアでは、水のある所に街ができるといわれています。その中でもローマはトレビの泉を初め、市内に豊かな湧き水があふれています。その水がローマ繁栄の礎なんですねー。ビックリ！）

一方、イタリア男性 Toudine Gabriele は、肉屋の社長ですが一人で三越にやって来ました。「buongiorno signorina!」と朋子さんに一目惚れ、モーレツなアタックの末「amare!」と見事に結婚にゴールイン。Gabriele のファミリーはレストラン経営者が多く、スペイン広場近くの有名店“グスト”もその一つです。そこで、イタリア人・肉屋の社長の夫と日本人・三越の店員の妻は、無謀にもレストランを始めました。艱難辛苦の末、このレストランはローマは勿



絶妙なアルデンテの Tomoko Special

論のこと日本にも多くのファンを持つ有名店となりました。荒川区出身の近藤朋子さんの道は、ローマにつながっていたと言えますね。

さてとある日、MACCの同僚・渡邊さんと勇んで奮発してのイタリアンランチへ行くことに。案内されたお店は、区役所から徒歩5分ほどのマンションの裏手です。ドアをあけるともう席は、2つしか空いていません。「いらっしやいませ」と厨房から忙しくも手際よく調理するシェフが、今回の二人目の登場人物、若山仁さん35歳。南千住在住を経て、現在荒川3丁目でイタリアレストラン“イル ビット”のオーナーシェフを務めるナイスガイです。若山さんは元々日本料理の板前さん、ひょんなことからイタリア料理の魅力に取り付かれ、これを極めんと単身イタリアへ住み込み修行のレストラン探しを始めました。ローマからシチリア、ナポリ、フィレンツェへ。しかしながら働き先はなかなか見つかりません。仕方なく、再度ローマに舞い戻りました。ようやく知人の紹介で、見つけたお店はなんと「Toudine Gabriele & Tomoko」！そこで、ローマでイタリア料理オーナーシェフの卵、若山さんとイタリア料理有名店オーナー朋子さんの出会いが始まりました。

その後、若山さんは夢中で働き食欲にイタリア家庭料理を吸収していきました。一年後には、もう立派なシェフに成長していました。日本に帰国してすぐに、店舗探し。「地域の人にイタリアの家庭料理を気取らずに食べてもらいたい」そんな純な気持ちは、荒川の人に受け入れられ、連日予約しないと食べられないほどの盛況ぶりであります。店名の“イル ビット”とは、「気軽なふだん使いの家庭料理」の意味だそう。地域の人に愛される、気取らないふだん使いのイタリアン



こちらも美味！イルビットの日替わりランチ

が目指すところだそうです。オープンして1年半、これからが期待される楽しみなお店です。

日替わりランチは、¥900で5種の Pasta から選べます。たっぷり Pasta にスープ、サラダ、パンにコーヒー付きで大満足。夜は、Pasta、ピザは勿論、アピタイザー、魚介、肉のアラカルト、デザート・コースまで充実のイタリアンです。

あーそうそう、思い出しました。ローマの朋子さんと若山さんが口を揃えて言っていました。イタリア・Pastaの本当のアルデンテを日本人に伝えたいと力説していました。“イル ビット”に行きましたら、ぜひこの真実を確かめてください。

最後のまとめに一言。荒川の朋子さんは35歳でローマへ飛び立ち、夢を実現されました。若山さんは35歳の現在、ローマを経て荒川で夢を実現されています。まさに、“すべての道はローマに通じる。そして、荒川へ”にふさわしいお話ではないでしょうか。そして素晴らしい偶然に出会えたことに感謝です。

では、またチャオ！



イルビットオーナーシェフの若山さんとトミー

【お店情報】

イタリア&創作料理「イル ビット」

荒川区荒川3-29-5

TEL 03-5811-6244 定休(水・日・祝)



「MACC通信」に関するお問い合わせ先

荒川区産業経済部経営支援課

TEL : 03-3803-2311 FAX : 03-3803-2333

E-mail : macc@city.arakawa.tokyo.jp

MACCホームページアドレス

<http://sangyo.city.arakawa.tokyo.jp/macc/>